

『ひきこもりのゴール——<就労>でも<対人関係>でもなく』

石川良子 著

(青弓社 2007年)

砂 谷 有 里

本書『ひきこもりのゴール——<就労>でも<対人関係>でもなく』は、ひきこもりの関連団体をフィールドに、当事者への6年間にわたる丁寧なインタビューの分析によって、ひきこもる彼ら／彼女らのライフストーリーについて描き出した1冊である。本書では、ひきこもりの「当事者」を「自らをひきこもりの当事者だと定義している人々」としている。15名（本書ではそのうち11名のインタビューデータを分析している）の当事者たちの人生の体験やそれについての考えや思いの語りから、彼ら／彼女らが、「なぜ人と関わるのか」「なぜ働くのか」そして、「なぜ生きるのか」といった「疑問」と「対峙せざるをえなくなった」[本書 p.232] ことについて、Anthony Giddens の「存在論的疑問」の理論を用いて分析している。

副題があらわしているように、石川は、ひきこもりのゴール（回復）を、「就労の達成」や「対人関係の構築」として位置付けることをしない。かといって、（就労や対人関係の構築に位置づけられない論者にしばしばありがちなように）「ひきこもり肯定論」を展開したりはしない。そのような「ひきこもり肯定論」に対して石川が行う「当事者の葛藤や苦悩を素通りしている」[p.27] という的を射た批判は、石川が、机上ではなく実際にフィールドに出て、当事者と関わり続けてきたからこそそのものだろうと思う。

そして、回復を設定する立場から距離をとる

うとする石川が、あえてひきこもりの<ゴール>を設定するならば、として挙げるのは、「ひきこもりの当事者として自己定義せずすむようになること」[本書 p.237] である。それは、ひきこもりの当事者として自己を定義づけなければいけない、<ゴール>までの果てしない道程がそこにある、ということであるだろう。

当事者が、精神医学や臨床心理学といった支援の「専門家」の言説を用いて自らの抱える問題を語りがちである[本書 pp.123-125] というのは、それと関連するのかもしれない。病名や症状、障害などのある種のスティグマを伴うものであってもそれを核としなければいけないということ。その空虚さを、自己像と他者との関係性の不安定さをそこからは感じる。そして、それはもしかしたら、今日の青少年の「生きづらさ」を象徴しているのかもしれない。（わたし自身は、リストカットに代表される、「自傷」を研究しているが、自傷者もまた、「リストカッター」と自身を称することからもうかがえるように、自傷を核としすぎるほどにしている。）

石川は、「ひきこもり」の当事者として自己定義せずすむようになることというのは、以下のことを含意すると述べる。1つは、「ひきこもりに関する諸言説を、自己を語るための語彙として利用しなくても安定した自己物語が紡げる

ようになるということ」、そしてもう1つは、『ひきこもり』というラベルを介さなくても他者との接点をもてるようになるということ」[本書 pp.237-238]。それがとても、心に響いた。その時彼ら／彼女らは、自分の存在を、他の誰でもなく自分自身によって、赦せるのだと、思うから。

付け加えて、インタビューの中で抱いた当事者への感情も記述されているところも、本書の、すぐれた点であるといえる。ひきこもりの当事者ではない石川が、当事者との関わりの中でもどかしく思ったり、否定的感情を抱いたりした体験が書かれている。そのような率直な描写は、「共感」できなくとも「理解」することは

できるのだという本書の主張の証として、多くの読者であると想定される「非当事者」と「当事者」とを「つなぐ」役割を果たしているだろう。

「ひきこもり」は「個の病理として医療の対象になりながら、対人関係や社会的文脈と密接に関連している」という点において、いくつかの青少年問題と共通する。本書は、青少年問題に関する社会学的研究のフロンティアを切り開くものとなるだろう。と同時に、精神医学や臨床心理学あるいは社会福祉学といった治療および支援の領域に対しても、沢山の示唆を与えるだろう。